

開催日時：平成21年11月20日（金）18：30～20：00

会 場：流山市水道局会議室

出席者：

<まちづくり顧問> 三好正也氏／サンジーヴ・スインハ氏／堀内都喜子氏

<流 山 市> 井崎市長／鈴木教育長

<オブザーバー> 染谷企画財政部長／山下都市計画部長／阿曾都市整備部長／高市健康福祉部長／  
宇仁菅環境部長／池田産業振興部長／渡邊学校教育部長／海老原生涯学習部長／  
田村学校教育課長／寺山指導課長／友金生涯学習部次長／直井公民館長／  
川根図書博物館長

<事 務 局> マーケティング課 5名

計 23名

井崎市長

フィンランドでの経験をもとに数々のご講演をされている堀内さんにお話をうかがう。ご講演テーマは「フィンランドにおける教育中心の街づくり」ということをお願いします。

堀内顧問

一人口520万人で教育先進国のフィンランドについて。フィンランド人の通常ライフスタイルは、日本と違い、勤務時間は朝8時から夕方4時までで、残業なし。夏休みは学校で2ヶ月半、仕事で4週間通常きっちり休む。税金は高く、普通税が22%、ガソリン税が60%、車などの高級品においては100%。しかし、その分子育て支援などの福祉に力を入れており、日本で話題になっている子育て手当が17歳まで毎月日本円で約、1万4千円貰うことができる。

人口520万人と非常に少ないことから一人一人の質を高めて一人も欠かすことができないということが根底にあり、教育にも非常に力を入れている。学費は大学まで無料で基本的に公立大学しかない。教科書も貸出という形だが、学校から与えられる。さらに、17歳以上の学生には、生活費（約5万円）、住居費（約3万5千円）、通学費も国から援助される。なので、親の収入に関係なく安心して学べるシステムが整っている。

教育内容については、日本の受験の為の勉強ではなく、なるべく身の回りの現象、例えば、料理をしたときに、どんな化学反応が起きてこうなるのか等に重点を置いている。生涯学習にも力を入れていて、10行人口の55%が参加していて、世界で2位。各、市が積極的に様々な生涯学習のイベントなどに力を入れている。一

堀内都喜子と申します。フィンランドには2000年から2005年まで住んでいた。現在、フィンランド系の企業メッツィオ・ペーパージャパンといい製紙機械、パルプを作る機械をフィンランドから輸入して日本の製紙会社さんに納入している会社、フィンランド系企業で働いている。今日はフィンランドの教育中心の国づくり街づくりということで、私が住んでいた時に非常にフィンランドというのは教育を大事にしていると感じたので、それについてお話したいと思う。

フィンランドは北欧の国で、日本からロシアを過ぎていくとフィンランドがあり。首都はみなさんご

存知のとおりヘルシンキというところで南の方。私がいたのはユバスケラというフィンランドの街で、約3時間半電車でいったところにある。ユバスケラは教育の街として有名で大学が充実している。元々フィンランド語の教育とかフィンランドの統治も行政も初めて行った大学があることで有名。フィンランドの人口は520万人。フィンランドは何万個も湖があるといわれていますけども、ちなみに右隣に見える白い建物も大学の物理化学系の学部が入っています。夏至の頃になると夏は非常に日が長くて真夜中12時がこんな感じです。冬はそのかわり日照時間が短いので、みんなひなたぼっこ街じゅうでして、のんびりと。夏は真夜中でも明るいですが、冬、今の時期11月は特に最悪で1ヶ月の日照時間が3時間。1ヶ月で3時間だったのでほぼ真っ暗な中で生活している様な状態で。冬になると氷が全部、湖が凍って、これ湖なのですが湖の上でスケート周囲4キロの天然のスケート場ができる。市のほうで全部氷を整備してくれてみんなそこでスケートをしている。ちなみにフィンランドの特徴的なところで言うと女性が非常に強いのですが、大統領も女性です。たぶんフィンランド語というのはまた英語とは全然違う言葉でして、フィンランド人にとっても英語を学ぶのも苦勞している。

今、学力調査のことでフィンランドが非常に話題になっていて、2006年の調査でフィンランドが読解のテストで2位、数学は2位、科学は1位、それに対して日本は15位、10位、6位だったということで、今フィンランドの教育ということで非常に注目されています。ただ今回のOETの調査はひとつの学力の見方であって、調査というのは20年後の準備できているかどうかということ測ることだと言われている。私もよく問題自体をあまり見たことが無いのですが、基本的には記述式です。

教育の前にフィンランド人のライフスタイルを少しご紹介したいと思うのですが、驚くべきは勤務時間が8時から4時というところでしょうか。4時には家に、残業もほとんどしません。夏休みも学校は2ヵ月半、会社は4週間きっちり休みます。その間、子供たちの宿題は一切無い。時々植物採集という宿題はあるそうですが。女性は多くが働いています。女性が働いて福祉が厚い分、離婚率も高いです。クラスの半分くらいの子供も達が再婚、父親なり母親なりの再婚相手と暮らしているという統計が出ている。失業率が7.3%と高いですが不安定な雇用がフィンランドは続いていまして、なかなか正社員になるのも難しいですし、その分、能力のある人はどんどん転職します。税金なのですがみなさん何%だと思いますか？まず消費税。30%という声がありましたが、食品に関しては17%ですけれどもそれ以外の、例えば普通の消費税は22%、ガソリンが60%、車とか高級品は100%というものもあるということで聞いています。所得税、給料から引かれる税金というのもしっかりありまして、日本の平均並の給料もらっている人の約半分は税金でもっていかれています。フィンランドの国としてやはりすごいのは子育て支援ですね。生まれた時から、本当に社会主義ではないのですがゆりかごから、と言われているくらい、行政援助政策とか充実しています。どんなものがあるかという、出産養育セット、これ生まれた時にももらえるものだが、こういった物が無料で市から配られるのですが、これ二人目の時はもう一セットもらえます。ここにはだいたい1年間必要なもの、洋服ですとか、本だったり、哺乳瓶だったり、そういったものが入っている。でお金としてもらえることも出来るのだが、お金よりもこちらの方に価値があると考えているようです。今フィンランドで問題になってきているのは昔、フィンランド産のものを使っていたのだが、最近向こうでもコスト削減で中国製のものもメイドインチャイナですとか、メイドインタイワンというようなものが贈られるようになった。ということで問題になっている。フィンランドって寒いのですが、寒い時は-20度、30度だったりすることもあるのだが、子育てで言うと非常に面白くて、出来るだけ外で子どもを育てようと外で遊ばせようとしている。赤ちゃんの時から-10度以下にならない限り外でお昼寝する、させる。こんな感じで赤ちゃんを乳母車に入れて、これでこのまま外に出すのです。2~3時間ずっと。その後、窓から子どもの寝ている様子を見る

のですが、逆にスケートさせながらお昼寝させている母親もいますし。それは空気がいいから肺を鍛えるという意味もあるのですが、決して虐待ではなく日本では子ども手当てというのが話題になっていますが、フィンランドでは17歳まで毎月子ども手当てがもらえます。いくらぐらいだというと一人目の子どもが100ユーロでだいたい日本円で1万4千円くらい。二人目は110ユーロなのでもうちょっと1万5千円ちょっと。子どもが多ければ多いほどたくさんもらえるのですが、そういった養育手当てが支給されている。さらに子どもの医療費が無料。フィンランドの教育方針というのは基本的には90年代にバブル崩壊ということで、失業率が20%まで上がったのですが、その中でどうしたらフィンランドが再び反映できるのかと考えた時に、やはり520万人非常に少ないですから一人一人の質を高め一人も欠かすことができないということが根底にあります。

まず教育、それから大人の再教育ということを目標に力を注いできました。どういったことを教育するのかというと、もちろん仕事に直結するようなことではあるのですが、最終的な目的は生きるための力ってことでさっきの焦点は公平な国際化ということで、それは日本もフィンランドも変わらないと思います。専門家の言葉では「新社会民主主義」という風に言われている。私の住んでいた街はちょっと今、資料を見ていたのですが、どんな目標があるかと言うとそれほど日本と変わらない目標なのですね。

日本との違いはというとクラスの庇護ということでユバスケラス市の目標で1・2年生は20人以下、3年生から中学3年生が24人以下に必ず抑えるという。県立は今、平均小学校1・2年生は17名、3年から高学年までは平均20.4人だそうです。高等教育くらいの進学ということで高校もそうですし、さらにその先の大学では、ここはポリテクニック大学といいまして専門大学なのですが、そちらへの進学100%を目指すということですね。教育ネットワークとかですとか特別支援教育も改善ということで、色々上がっている。ちょっと写真でどんな学校なのかなということなのなのですが、これ小学校1年生なのですが、クリスマス前に裁縫をしていたり、クラスが本当に少ないですし更にそのクラスを二つに分けて授業をしたりするのですね。ですから、目が届きやすいので小学校1年生でも、こうやって針と糸を使う作業とかでもできるのだと思うのですが、今移民の子供たち…今までヨーロッパの中で一番移民が少ない国といわれてきたのですが、最近は多く受け入れるようになってきた。こちらの写真は職員室の写真ですね。人はいませんが、日本の職員室とは全然違うのがそれぞれ作業部屋を持っているのですが、みんなで話し合いをする時の部屋というのがこんな感じです。ここでコーヒーを飲み、くつろぐという、ちょっと日本では考えられない感じなのですが、中学校、もうちょっと大きくなると、授業は基本的にグループワークが多いです。非常に。プロジェクト型といいまして課題を、小学校1・2年生はそうゆう訳にはいかないですが、中学くらいになると課題を与えてグループで考えて解決して、発表するということが多いですね。

森を所有している家族が多いので、森の伐採を家族で手伝いながら、狩猟を趣味としている人が多いですね。フィンランドは、去年銃の乱射事件がありまして、それで最近は厳しくなっているそうです。具体的にフィンランドは国の教育学費は大学まで無料。基本的に公立しかありません。で給食費も無料。文具もノートですとか鉛筆は学校に行ってもらう感じですが、ただし教科書は学校も予算がないので教科書は持ち回りで貸し出しです。3,4年間同じ教科書を使うという感じですね。一年使ったら学校に返して一年下の学年の人たちがそれを使うという形で。ヨーロッパは大学が無料というところは多いのですが、フィンランドのすごさっていうのは、やっぱり学費だけではなく、生活費も援助をするということですね。17歳以上の学生に、毎月生活費として300ユーロ、約5万円近くですね。あ

と住居手当として、月200ユーロということで、もうこのお金だけで生活ができるということですね。なので、親がまったく子供のためにお金を貯金するという事はないですね。ですので、考え方としては個人では貯金しないけれども、国として、税金でお金を取って貯金していくというのがフィンランド流です。通学費の手当てというのもあります。人口密度が低くて田舎になると学校が遠かったりしますので、低学年だと3、5キロ以上の人にはタクシーなりバスなりが市で援助するという方針になっています。なので、高学年になれば距離は伸びますけども。それから学童クラブですね。特別擁護の児童だったり1年から5年の児童だったり、両親共働きなので1、2年生の学童クラブというのがあります。

予算なのですけれども基本的には国が54.7パーセント、自治体が45.3パーセントで、基本は20人以下を目指す少人数。で小学校入学は7歳からですけども、プラスマイナス1歳で6歳でも8歳でも状況に応じて入学の年は柔軟性を持たせています。

小学校の0年生というものがあるんですけど、まー、いわゆる保育園なんですけども、小学校1年生の前に無料で小学校0年生みたいな形で市が教育のサービスをするところが多いです。これは、小学校に上がるための準備をさせているということですね。で更に中学校の4年生ということで、3年で卒業なんですけども、さらに、勉強をして、上の学校に行きたくないというひが多ければ、そういった教育も提供しなさいよということです。

中学校なのですけれども、学校にまったく来ていないですとか、この子は、勉強していないという事になると、留年させることもあります。小学校と併設されている中学校も多いですので、そうすることによって、先生の数を融通させ、先生が小学校の最初から中学校まで実際教えることでなくても、情報がお互いに行きやすいということがありますね。それから、外国語はほんとに英語だけではなく、スウェーデン語、フランス語、ドイツ語など、3、4ヶ国語教えているところも多いです。フィンランドの面白いところ、プロジェクト型というのがありますし、今回ちょっと教科書を見てみたのですけども、例えば科学にしても中学校の科学の教科書に、なんで寝癖ができるのかとか、化粧品にどのような化学薬品が含まれているのかとか、料理をしたときに、どんな化学反応が起きてこうなるのかとか、そういった観点から科学を教え、身の回りであった現象などを教えている。エリート校がなく、できない子ですとか、少し落ちてきた子には、補習授業ですとか、特別教育を与えて、キャッチアップすることができるようにするという事を、フィンランドは非常に多くしているなーと思います。先生の授業はその先生の一言で決められる事があるので、校長先生が社長みたいなものですよね。終身雇用である場合もありますし、契約社員みたいなもので、一年契約で先生を雇う場合もありますし、あと、最近ではリストラもあるそうです、フィンランドでは。

それから面白いのはアルバイト奨励をしているという事ですね。小学校から、畑の仕事とか、農家も多いので、ベリー摘みなど夏休みが長いので、その間に仕事をしてお金を儲けることもしますし、中学ぐらいになると普通にアイスクリームを売る仕事とかしています。あと、奨学金をがんばったでしょうということで、別に成績が上位という事ではなくて、その年、英語の勉強がんばりましたとかいうことで、1000円とか2000円くらいの物を、学校であげている所も多いです。

あと子供議会というのもとても活発で、市の子供議会があって、そこで子供たちが市について、こういうものがあつたらよいか、こうしてほしいというのを話し合ったりというのがありますけども。日本に比べると、団結力が薄いんですね。自由気ままにやっている部分、クラスじゃあ、みんなで頑張りましょうみたいなのが、あんまりないですよ。で、私もいろいろ調べてみたのですけども、フィンランドで、学力向上の国家的なプロジェクトというのが、あんまりないのですよ。例えば読解力アップとい

うことで、他教科との協力をしたりですとか、自習時間を増やしたり、親にお願いして、家で読み書かせの時間を増やしたりとか小説家と交流して、実際に本を書く人たちの話を聞くというプロジェクトもあります。それから、職業体験はどこの学校でも、最近は今、頻繁にやっています。ただ、日本の職業体験と違うのは、一週間、しかも一日6時間働かせるということで、そこの職場で、実際にその職業体験をする前に、履歴書を作成して、まず面接を受けて、ということで、本当の仕事を受けるときと似た環境で職業体験をして、自分の体験したところからは、更に評価をもらうという事で。フィンランドらしいんですけども、実際に似とった状況で職業体験をして、あとはやはり、フィンランドでもいじめの問題はどうしてもあります。残念ながら。いじめを無くすということで、学校の授業の中で議論したり、テレビゲームで、いじめのバーチャルゲームみたいなものをつくったり、サポーターチームを学校で育成したり。子供のサポーターチームですね。たとえば、嫌なことがあったら、いつでもこの子達に相談してもいいですよという形で。サポーターを育成し、ボランティアっていうのは、やっぱりフィンランドでもとにかく、社会性を身につけようということで、人気になっている。子供たちができるボランティアの検索ツールがあったり、あと、ボランティアというと、なんか老人ホームとか保育園でのお手伝いみたいなイメージがあるんですけど、それだけじゃなくて、例えば同じ世代の障害を持つ人達との交流会ですとか、年下の子供たちの補修授業の講習をしたりですとか、あと、バザーなどを企画して募金をあつめたりですとか、近所の老人ホームではなく、近所にいるお年寄りの買い物の手伝いですとか、そういった形のいろんなボランティアをしています。

あとフィンランドは90年代前半に教育改革をしたときに、一つ力を入れたのが、生涯学習です。現在、就業人口の55パーセントが生涯学習に参加していて、これは世界で2位といわれています。例えば私のいたところは人口12万人なのでですけども、そこで、市が企画している生涯学習に参加しているのが2.4万人、一年で4万時間の授業を企画しています。また、市が授業を企画して、企業に売ったりもしています。例えば、語学の授業とか、例えば企業が英語を社員に習わせたいというときですとか、生涯学習の団体が授業をコーディネートしたりもしています。

もうひとつ、フィンランドの特徴は、読書の量が非常に豊富、国民一人あたり、年平均23冊といわれています。書簡の数も、人口当たりでいくと、世界一といわれています。ということで、フィンランドは非常に読書が盛ん。フィンランドは田舎ですので、日本のようにやることがあまりないですので、読書に非常に時間を費やせませすし、4時5時に家に帰れる状況だったら、読書の時間が普通にありますよね。私のいた大学は学力調査の統計を採っている大学です。その専門家の先生が成功の秘密としてあげているのが、フィンランドは競争をしないのですね。学力の競争はないです。ただ、仕事を得るときにはあるんですが、新卒採用といったことはないですので、経験のあるひとと、ない人が同じ土俵の上で競わなくてはいけません。そのときにやっぱり重視されるのが教育ということですね。そういった目で、日本のような偏差値ですとか、能力別クラスというものはないですけど、ほんとに役立つ能力というものは必要なわけで、社会における教育の重要性が高いって言うのが、その、若い人たちはもちろん勉強するのは嫌だけど、しかもさぼりも多いですが、それでも仕事を得るには勉強しないと仕事を得られないという考えができあがっているのがフィンランドですね。で、ある意味学歴社会なのです。日本の学歴社会と違うのが、学校の名前は関係なく、何を学校で学んできたかっていうのが仕事をするときに問われるので学歴社会といっています。あと、フィンランドは先ほど言ったように福祉が充実していますので、経済各社も、比較的、西側の国としては少ないです。地域差もほとんどない。親の収入に関係なく、安心して勉強できる。私も向こうに行っているいろんなフィンランド人と話をして思ったのが、日本にいるとどうしても経済的な不安というのが子供たちにも行きますし、お金がないから大学どうし

ようとか、塾にいけないとか、そういった形で不安になるということですが、フィンランドはすごくしっかりしているので、心配がないというのはいい所だと思います。

それから最近フィンランドが力を入れているのがチームワークですね。心理カウンセラー、社会福祉士、役所、警察が定期的に話をし、少しでも問題の兆しが見える子供たちにどういったバックアップができるのかといったことを私の友達の教師がいるのですが、多すぎるっていうくらい、そういう話し合いをもっています。

その下に Wilma システムと書いてあるのですが、新しいフィンランドで大きい都市で生まれた IT を使ったシステムで、自分の子供たちが、朝、家を出て行ったけれども、ほんとに学校に行っているのかをチェックするシステムです。先生たちがネットで出席を管理して、親が自分のパスワードがあるんですね。それをいれると、じぶんの子供が 1 時間目うけたね、2 時間目うけたね、で、もし保健室に行ったり早退したりすると、こういう理由で早退しましたっていうのが出てきて、逆に親のほうから先生にメールを送ることもできて、先生も親にメールを送ることができるになります。もちろん携帯電話もみんな知っているんですけども。それから今、フィンランドでは今、特別進級者が増えています。これは悪いことではなくて、昔だったらこの子おかしいなですみませんが、今は、もしかしたら、この子はこういう病気を持っているのかもしれないとか、こういうことが原因なのかもしれないと、わかるようになってきたので、そういう子たちには早期の手当てをするということで、しています。もちろん親の離婚が増えるということもあって、生活的に少し落ち着きを失っている子供が多いとも言われています。あとやはり移民の子供たちが多いためそれは文化的には豊になることなのでいいのですが、言葉の問題もありますし、あと逆に教育にあまり熱心でない移民のお父さん、お母さんがいるのでその点が問題になっている。あとフィンランドでも保護者の要求というのが最近過熱していて、モンスターペアレンツという言葉はまだないですけども、新聞によくこんなおかしな親がいたという記事が載っていたりする。これだけ充実したプログラムがあるフィンランドでもやはり子供たちのストレスというのはもちろん親の離婚とか家庭環境が複雑になってきたり、あとネットだったり色々な要因があるのですが子供はよりストレスを抱えていると思われまます。

井崎市長

どうもありがとうございました。それでは今日はスインハさんがお休みなので、鈴木教育長、三好さんの方から質問があれば。

三好顧問

たいへん勉強になりました、だいたい 10 年くらい前から現在に至るまでの現状ですね、現状を 9 割くらい説明していただいたのですが、びっくりしましたよ。それでその現状ができあがるまでには、歴史があるわけですね。歴史というと必ずそこに周りの国との関係、左側にはノルウェー、スウェーデンがあるわけですね。右にロシアがあるわけなのですが、ロシアが一番近いのですよ。それがちょっともう一分ですけども説明していただきたい。私も色々な言語をやっていますが、勉強したのだから関心があるのですが何系の言葉なのだろう。フィンランド。それはまた人種とも関係がありますのでね。

堀内顧問

歴史でいいますとフィンランドはもともとスウェーデンに統治されていたのですが、そのあとですねスウェーデンとロシアが戦って、ロシアが勝ったということで自治は認められていたものの、ロシアの傘下には入っていました。日露戦争の混乱になってフィンランドが今から90年ほど前ですね、独立をロシアからしたということで、それもあってフィンランドでは比較的日本人に対して感謝している、日露戦争のお陰で。フィンランド人はよくアジアから来たと言われてます。本当のところはわからないのですが。言葉に関してはフィンランド語というのはフィンランド語とハンガリーですとかエストニアの言葉が同じものに属していると言われてます。隣のスウェーデンやノルウェーというのはゲルマンの方に入っているのですが、また全然違うのですよね。フィンランドは第二次世界大戦でロシアと戦いました。ですから、一応、敗戦国です。ロシアと戦って勝敗はつかなかったもののロシアが勝ったということになりますので、敗戦国として多額の賠償金を払いました。ただ逆に賠償金のお陰でフィンランドは経済が復興したと言われてます。努力して。やはり冷戦時代はずっとロシアが恐怖でいつ攻めてくるのかと恐怖だったわけですね。今は経済的に非常にロシアとうまくやって経済発展をしようとフィンランドもしています。

### 三好顧問

言語はスウェーデンと違いましたか？ トーンランゲージですか？ ストレスランゲージですか？

### 堀内顧問

フィンランドはモノトーンと言われてまして、ほとんどトーンがないです。

### 井崎市長

それでは鈴木教育長から質問をしていただきたい。

### 鈴木教育長

どうもありがとうございました。楽しみにしておりました。たくさん勉強になったのですけれども、フィンランドって僕らのほうも非常に興味がありまして、この間の学力調査の結果が大きいと思うのですね。サライヘン先生といういわゆる教員養成の先生が日本にいられていてですね。大学で講演したものをみた。その中に悩みがいっぱいあった。その中にあった悩みが今裏付けられたというような感じがした。他の国の人が言っているから本当かなと思っていながら聞いていたのですが、まさに学習意欲が低いとか。あそこは軍隊がありますよね。そこに入れないう子がいるという。体の関係じゃなくて精神面の問題で軍隊に入っていけない。そういう子もいるということで、そうかなという思いで聴いておりました。フィンランドの教育は学校そのものも、勿論ですが、社会のありかた、国が教育を手厚く補償しているという部分が日本とそうとう違う、ただし、日本と状況が違うのは、先ほどの税金のことも、あまりにも違いますよね。それはしょうがないと思うのですけど、そういう部分でおおきいなとは思いますが、そういった中で、大人の再教育も外のレベルに近づけるようにというお話だったのですけども、そのへんをもうちょっとお話していただければなと思います。

### 堀内顧問

—大人の再教育について。フィンランドでは、日本のように、一度就職すると、比較的安定して長期間働ける国ではなく、契約で働く場合が多いため、専門知識や技量がないと生き残れない。そのため、

積極的に新しい知識を学び、会社も1年間休んで訓練をするという事を許すところが多い。学生ならば無料で生活支援もしてもらえ、40、50歳になってから大学に行くひともいる（環境が整っている）。—

おっしゃる通りで、向こうはほんとに大人の再教育といえますか、理由の一つとしては、まだ雇用が不安定だということもあるのだと思います。日本だと一回職を得ると比較的安定していて何か問題がなければそこで長期間働くことができると思うのですが、フィンランドはまず契約が3ヶ月、教師も3ヶ月で、その中で生き残っていくには、専門知識、技量がないと生き残れないということで、いやおうなく再教育を受けています。再教育の期間なのですが、市でやっているのもありますし、職業訓練所もありますし、大学や専門大学で設けているオープンカレッジの授業もあります。向こうは比較的値段が安いんですね、日本みたいに一年大学に行ったら100万くらい取られるということはないわけで、一年通っても、10万20万くらいで、会社も1年休んで訓練するというのを許すという企業風土がありますので、仕事をしながら休みをとってやるという人もいます。オープンカレッジで、学生としては無料で生活費の支援もしてもらえますので、大人になって、40、50歳になってから大学に行く人もいます。子供たちもそれを見ていて、最初はなんで大人なのに勉強をするのか不思議に思うとおもうのですよね。でも、今はそれが当たり前になっていて、コースもITなどいろいろありまして、その授業に行かなくても家の中で受けられるということもできるようになっています。勉強したことが仕事で評価してくれるという構図ができているというのも日本と違うかなと思います。

#### 鈴木教育長

雇用の状態というのが違って、大人にせっぱつまった感じがしない。離婚している人は多いけれども、家庭の中の大人と子供の関係が日本と違ってすれ違いのようなものがない業態でできるというのがある感じがしました。日本でも子供の職業体験がありますけれども、フィンランドから学ぶものはそういうあると思うのですよ。日本でやっているのは生活に技を学ぶのではなくて、社会内でのマナー学びの体験なのですよ。みんなと協力できるかですとか、子供の職業体験では主としてそういうことになってしまっている。その点に関して何かフィンランドはゆったりしたものがあるように私は今かんじたのですね。

#### 堀内顧問

—日本人より勤務時間が短く、家に帰ってくるのが早いため、親も子供とコミュニケーションを取る時間が圧倒的に多い。—

ゆったりしているという部分では4時5時にみんな家に帰ってきますよね。子供たちも部活がないので2時3時に帰ってきます。そこから地域でスポーツだったり、音楽だったり活動はしていますので、一旦家に帰ってきてから親に送り向かいしてもらって、いくつという事はあって、けっこう忙しいんですけど、それでもやはり、コミュニケーションをとる時間というのは日本と比べて圧倒的に多いです。父親も4時5時に帰ってきます。本で読んだんですが、6時に帰ってくる父親はひどい父親だと書いてありました。そういう感覚がフィンランドにはあって、親子のコミュニケーションの中で学ぶ教育もたくさんあると思います。読書や森に散歩に行くなどその中で学ぶことはたくさんあるので、先生の



勤務時間も調査によると日本は約11時間、フィンランドは6時間、そこも違うところです。

三好顧問

民族によって論理の立て方が違いますので、一番大きな根っこにあるのは言語なのですよ。で・・・が若いときに書いた言語学の本があって、言葉が違くと倫理観まで変わってくると。フィンランドの言語はスウェーデン、ノルウェーとはかなり違うのですか？

堀内顧問

そうですね、まったく違いますね。

三好顧問

例えば何が違いますか？

堀内顧問

日本語のように、動詞の形が15個あるのですが、それで一つの言葉がいろいろ変化していくということ。

井崎市長

本を読ませていただいたときから、いくつか質問があったのですが、まず、教育に関してそれから社会に関して。教育に関しては、・・・の中でトップクラスと、これの理由で2つ3つ明確なものがあれば教えていただきたいと思います。それから特別支援教育というものがありませんが、これは一般的な教室の中に統合していくのではなくて、分けているのですか？それとも一緒ですか？その二点についてお聞かせください。

堀内顧問

—教育は少人数制で、一人ひとりに目を配り、進みが遅い子供は補習授業、特別支援授業で支援する。特別支援授業はほかの生徒に追いつき、通常授業に戻るのが最終目標。先生、ボランティアが協力して特別支援授業を支援する。—

まずその教育にかんして、いろいろな意見があるのですが、やはり少人数であって、一人一人に目を配ることができるというのがひとつです。その目を配る中で、読み方がうまくできないなど平均よりできない子がいたら、すぐ補習授業をします。それは子供のほうから、わからないから教えてなど言うてくる場合もありますし、先生が教室の端にその子達を連れて行って、ほかの子供と少し違うことをやらせる場合もあります。それも特別支援教育につながっていくのですけども、同じ教室でする場合もありますし、別の教室に行ってやる場合もありますが、基本的には分けていてもいずれは自分の教室に戻れるようにするのが最終目標なのです。なので、分けたからずっとそこというわけではなく、そこで少し手助けをしたら戻すということをしています。また、クラスを二つに分けるだけではなく、アシスタント制というのを多くの学校でとってしまして、先生の資格はないのですが、ドイツがやっているのを聞くと、お金があまりないので、最低の賃金でやってもらえて、なおかつ教育が好きな、だいたい多いのが、教師を目指している高校でたての子達であったり、自分の子供がいる親であったりがしていま

す。体の障害だったり、知能の障害だったり、事情はいろいろですが、ちょっとできない子や、問題のある子に重点的に授業中にそばで手助けしていくということもあります。アシスタントの先生を雇うお金や時間がないと、子供の親にボランティアで来てもらって、家庭科の授業や理科の授業だと、一人一人に目を配る作業をするなかで、したほうがいいものは、どんどん利用しています。クラスを分けるのも、同時に分けるのではなく、Aのグループ、Bのグループでわけて、Aのグループは朝1時間目からきなさい、2時間目からは全体の授業をします。で、最後にBのグループだけ1時間遅くまで授業をする形で、そういったことが一番の理由であり、親の収入などにあまり左右されずに勉強ができるということです。

井崎市長

社会のほうに移りますが、これだけ行政がお金を出して、日本では税金の無駄使いだといわれるし、アメリカでも官僚制というのは非効率だといわれているのですが、効率という点で国民は納得しているんですか？

堀内顧問

—教育費を国民一人当たりのGDPで見ると、日本が3.4%、フィンランドが4.9%とフィンランドと、国が払う教育費はフィンランドの方が多い。反対に、国民が自費で払う教育費は、日本の方が多い。—

基本的には納得していますし、自分たちもその恩恵を受けて、子供も大人も勉強できますし、利用できるものは極力利用しようということで、大学生活を10年送る人もいますので。税金について、一つ触れていなかったのですが、教育費、一人当たりのGDPで見ると、日本は公立の費用が3.4パーセントといわれています。自費ではらっているのが1.5パーセントといわれていて、トータルでGDPあたり4.9パーセントといわれています。フィンランドは逆に公立で使っているお金が5.9パーセント。自費で出しているぶんが0.1パーセントでトータル6.0パーセント。と一たるでいうと、フィンランドのほうが多い。

井崎市長

—福祉に力を入れており、格差は少なく、能力の差があるフィンランドで能力のある人たちは不満を持たないのか？—

格差はすくないけれども、能力の差というのはあるということですよ。アメリカとカナダ、アメリカから国境を越えてカナダに行くと、みんなができるだけ中流階級にしようとする、平均的な生活をするほうが、国力を維持できるという考え方で隣接しても違うことは違うのですが、今の日本、そして日本が真似をしようとしてきたアメリカ。アメリカが日本というよりは、日本がアメリカ型になっていると思うのですが、格差が少なく能力の差があるということで、よくできる方にとって不満にはならないのでしょうか？

堀内顧問

—能力があり、お金持ちになりたい人は海外などに行く場合があるが、基本的には格差が少ない社会の

ほうがすばらしいという考えを持っている。家や車を買うために貯金はするが、格差社会をよしとは思わず、アメリカのやり方に批判的。—

能力の差が出てくるのはもちろんですし、不満という不満は・・・例えば学校内でいうと、できる子供たちというのはどうしても放っておかれるので、先生の興味もできない子のほうにいつてしまうので、できる子がつまらなくなってしまうという弊害はどうしてもありますね。なので、そういう子達があまりにも暇な場合は、一つ学年を上げてしまうというのも一つの手です。自分の能力があれば、お金持ちになりたいという欲求はやっぱりあるわけで、そうすると、海外で働く人もいますし、ただやっぱり、格差が少ないという社会のほうがすばらしいという考えはみんなもっていますね。で、お金ってものにあまり執着しないのですよね。そういう風に社会で育っているのです。家を買ったり、車を買うのに多少の貯金はしますけど。それから、経済格差をよしとは思わない、なのですごくアメリカのやり方には批判的。

三好顧問

戦争には巻き込まれなかったのですかね？

堀内顧問

ロシアと、だけですね。

三好顧問

—フィンランドのどういう所を取り入れるべきか？—

夜が長いというのが、今日の話と関係があるのではないかと・・・寝ているわけじゃないのだから、なんかみんな楽しいことをやろうよ、と。知的な活動を暗い間はやろうよと。そういうハンディキャップをアドバンテージにしようよと。人口の多い日本のようなところは、いいところ取りですね。どういうフィンランドのいい所を取り入れたらいいとおもいますか？

堀内顧問

—家族で過ごす時間や少人数制のクラス。教育では学校、学生、社会のネットワークがうまく働いてほしい。—

非常に難しい質問ですが、子供手当や無料化など今の政権は上げていますが、ただ、一気にそれをしようと思っても難しいと思うのですよね。徐々にできる範囲でやるのが重要だと思いますし、一番いいのは家族で過ごす時間を増やすとか、少人数の授業はできればいいなと思います。あとは柔軟性のある対応・・・抽象的な話になってしまうのですが、教育は教育ということではなく、学校、学生、社会、すべてが関わりあっているはなしなので、もっとネットワークがうまく働いていければいいと思います。

井崎市長

今度はみなさんの方から質問を受けたいと思いますが、教育部長のほうからお願いします。

渡邊教育部長

—遅刻や読書量の低下について、どのような取り組みをしているのか？—

私も質問がありまして、最近遅刻が多くなっており、読書量がかなり減ってきている。フィンランドで10年前くらいに、新しい取り組みをしている、実際どんな、具体的な取り組みとしてあるのか？そのへんのことで、流山でも読書員が力を入れていますので、学び得るものが何かあるのかなと、もしよろしければ教えていただきたい。最後に、2006年に改定がされたときに、最初は1996年だったみたいですが、改正がされたあと、かなり国家の統制が強くなったということを先ほど見たのですが、国家の統制が強くなったことと、映像の中で、チームワークで問題に対応すると、その中で映像にはのっていないのですが、言葉の中に、警察もその中に入っていると、いうことで、社会的に何か問題もあるのかなと、その辺のあたりを、もしよろしければ教えていただきたいな、と。

#### 堀内顧問

— 家族の協力で読書の時間を取ってもらい、授業の時間に10分間の読書の時間をとっている。フィンランドでは、教育について、自治体に任せている部分がとても多く、100ページ余りの指導要領の他は自治体が決めて教育を行っている。 —

まず一つ目の遅刻が多いということですが、遅刻やサボる子は先進国の中では多いです、実は、学校が大好きというわけでもないのですが、卒業するためには留年もあるのでやっぱり行かなければいけない。遅刻に関しては親が共働きなので、家を出て行ってしまったら、子供たちがどこで、どうしているのか、わからないということで、去年、今年から新しいインターネットのツールが大きい大都市ではできて、9月にフィンランドに行った時にいろいろ家族と話をしたのですが、やっぱりクラスにはそういう子供たちが時々いるらしいんですね。家を出たまま二日間も帰ってこなかったりする場合があります。なので、そのシステムがどの程度効果があるのはわからないのですが、改善するかもしれないですね。もしかしたら。

読書に関しては、フィンランドもおっしゃるとおり、漫画も流行っており、インターネットの影響もあって読書量はどんどんへっていったんですね。ただ、何年か前に国家的に学校の読書のプロジェクトというものがどんどんできていって、その中で多方面からの推進というものをしていたのですが、例えば、他教科とのコラボレーションということで、美術の時間に絵を見たり、音楽の時間に音楽を聴いたり、そこから連想される詩を書いてみるとか、逆に本を読んでから絵を書くとか日本でもやっていることだと思うのですが、多かったのは、家庭で読書の時間を取ってもらう。家族全員で。あと学校で毎日10分間読書のじかんを作るなど。あと、上の学年の子供たちが下の学年の子供たちの教室に行って、本を読み聞かせるとか。作家の先生をよんでインタビューや、ハリーポッターとか、面白い本を読んで自分の言葉で書いてみるとか、自分の方言で白雪姫の本を作ってみるとか。読み書きを一緒にするプロジェクトがあると聞いております。

2006年の改定のことは、私も勉強不足で詳しい内容は言えないのですが、もともとフィンランドの教育というものは、すごく学校や自治体に自由に任せていた、それまで何百ページもあった指導要領が改定したときに、たったの100ページくらいになったということで、残りは自由にどうぞ、見たいな感じで。今はそれよりは確かに増えてはいますが、厳しくなったというかんじではないです。警察についてなのですが、フィンランドでもやはり、アルコールの問題やドラッグはあまりないんですけども、アルコールやタバコの問題はどうしてもあるんですね。そういう問題については警察だったり、親にも注意しますし、それでもだめだったら警察に来てもらうとか、警察や社会福祉士、心理カウンセラーが問題のある子供をピックアップしたり、こういう問題があるから気をつける形で話し合いをして

います。

井崎市長

では、後ろの方、質問ございますか？

(課長)

ドロップアウトしてしまう子供たちの数だとか、現象とかそれはどうなのでしょう？

堀内顧問

ドロップアウトでいうと、留年3年という子もいます。中学生で。私の知り合いの子が言っていたのですが、同級生がお酒を中学生で飲んでいました。飲めない歳じゃないの？と聞いたら、何年も留年していて、年齢的には飲めるような子もいます。日本にくらべると、日本ではそういう子達は不良とかになりますけど、フィンランドの学校では校則がほとんどないというか、自由ですので、そういったことに関して不満はあまりないです。タバコやお酒というのは、どうしてもフィンランドの子達に出てきていますし、それに対して親もいますが、ある程度のことになると、もうしょうがないということで、諦めているということがあります。男女交際についても、非常にオープンで、高校のときから普通に同棲しはじめるので、そこはみんなおおらかですね。日本とはちょっと感覚がちがうですね。不安定ではあるけれども勉強にはあまり影響してこないというか、とにかく卒業しないと仕事にありつけないので。

(課長)

アメリカや日本にはボーイスカウトや、ごみ拾いなどのボランティア活動がありますが、フィンランドではどうですか？

堀内顧問

ボーイスカウトはフィンランドにもあるのですが、それほど盛んじゃないですね、ただ、学校の活動としてのボランティアや、職業体験という形でやっています。職業体験の目的というのは社会性を身につけるということなので。ただ、実際に役に立つことも教えていこうと。

(校長)

ーフィンランドは失業率が高く、雇用不安定と聞きましたが、なぜ国民の経済格差は広がらないのか？日本の学生はなぜ入試の為の勉強をしていて、なぜ勉強をしているか？という意味を考えないが、フィンランドの学習内容は？ー

お話をうかがう中で、私自身が社会科の教員でしたので、国のしくみとして、うまく自分の中で繋がらなかったのが、失業率が高い、雇用不安定なのに経済格差が広がらないのはどういうことなのか？学校に関しては、日本の学生の一つ弱いことは、なぜ、例えば国語を勉強するのか？を考えず、テストはテスト、入試は入試ということを考えている。お話を聞くと、教科書の中に生活に密着した教科書、子供たちの生活により近い学習内容、その辺、お国の状況をお教えてください。

### 堀内顧問

ーフィンランドでは17歳から64歳までの国民は失業保険があり、失業していても生活には困らない。仕事を持っている人よりは収入は少ないが、生活できる程度の収入は支払われるため、経済格差はあまり広がらない。仕事をする人達の理由は、生きがいの為や、家や車を買うため。勉強に関して、フィンランドでは詰め込み式の勉強ではなく、問題を解決するための力を養う事を重視している。ー

まず、雇用が不安定ということなのですが、17歳から64歳までの人が貰える失業保険のようなものがあり、失業していても、生活にはほとんど困らない、家を失うこともないということになっています。もちろん仕事をしていたときに比べて、自由になるお金が少ないですし、自分が全く暇になってしまうので、そういう意味ではきついですけども、仕事をしていてもしなくても、それほど大きな差は出てこないというのが経済格差の広がらないところに繋がると思うのですけれども、確かに不思議なところではあって、働いても税金でとられていってしまうので、残るのはそんなにかわってこないのですね。何のために仕事をしているかという、自分の生きがいのためや、ローンをくんで、いい家に住みたいとか、車が欲しいとかですと、仕事をしなければいけないので。勉強に関しては、できるだけ身の周りの現象に基づいて勉強をしていくということはあるのですね。詰め込み方はフィンランドではできるだけしないです、ただやっぱり、小学校低学年では詰め込むのはしょうがないのですよね、記憶しなければいけないことは、やっぱりたくさんありますから。ただ極力意義を持たせるようにするのは先生方も努力していて、それがあって、プロジェクトがたの授業であったり、問題を解決する力を重視していて、やっていることは比較的かんたんだったりするのです。嫌でも卒業しないと大学にいけないといい仕事につけないので。

### 三好顧問

スウェーデンはバイキング、海賊精神が残っていると。侍魂があるらしいのですが、今日の話の聞いていると全然感じませんでした。あまりにも恵まれているとそうなっちゃうのかな？と思ったのですが、どうですか？

### 堀内顧問

ーフィンランドでは、女性の進出が著しく、博士号をとる人達の6割が女性。失業率も男性の方が高く、働いている人口も女性の方が多い。ー

歴史的に見ると、バイキングはノルウェー、スウェーデンが主なのですね、フィンランドは少し違うのですよ。フィンランドは農耕民族で、ほとんどが田舎で食べるのに苦勞するくらいの生活をずっとしてきて、あんまり貴族の文化も持ってないし、元々格差がない世界であったと思うんですね。あと女性が強くて女性の進出がすごい。女性がパワーを持つと、安定とか安全な社会にもものすごく力を入れる。教育ですとか。戦争だとか、そういう軍事的なところからは、どうしてもどうでもよくなっていくというか、でもフィンランドも徴兵制で、ただ半年ですし、週末ごとに家に帰れる徴兵制なので、韓国とかの徴兵制とは全然違います。自主的に訓練に行く女性もいます。博士号を取る人たちの6割が今女性なので、大学にしても、私のいた学部の99パーセントは女性でしたし、教育学部も8割女性2割男性で、男性をもっと入れようと入学試験で甘い点をつけていたのですが、それでも、女性のほうがよくできるので、結局男性の数が増えない。女性が強いということも、あんまりみんな、そういうことを気にしない。失業率も今は男性のほうが高く、女性のほうが低いです。働いている人口は女性のほうが多い。

井崎市長

失業保険について、日本の場合は先進国の中で4、5年前に一番短くなったのですね。そういうこともあって、今度は一気に生活保護に来ちゃったのですね。私は失業保険の期間を元に戻して、そのかわり生活保護はなかなかできないという風にしないと生半可働きのならば生活保護に行ってしまったほうがいいという様になってしまうので、日本のようにならないように。

鈴木教育長

未来作りをしていける人間を育てるために基礎というものが欠けているからそれを徹底するということが大事なのですが、最近日本で言われているのは応用力が弱いと。長文の問題が出ると答えられないと。これは、そんな問題で時間をかけていると、ほかのもので点数を稼げないというのが受験のありかたですね。長文の点数配点が高ければ、やるのかもしれない。応用力というのが学校には今、問われている。そこで、流山で進めているのは、コミュニケーションの力、特に人との関わり、国語力に力をいれています。

堀内顧問

教育に関して、大学の試験でも、本を三冊読んで何々の定義について、その場で2ページ書かされるとか。そういった意味では応用力というのは間違っていないと思いますし、こういった形式の問題がどんどん日本でも増えていってほしい。

鈴木教育長

学校で共通してやればいいのは3分の一で、あとの3分の2は学校が選ぶなどの方法などを考えるのは今のルールの中でもできないことはない。現場は無理というかもしれないけど、それはトップの力量。しかし、今はお金がない。魅力ある学校にするためにも、こういうものはわずかでも与えて、その上で校長の評価をしていく、そういうシステムがだいじなんじゃないかと思う。

堀内顧問

そのお金の話でいくと、私のいたところは、絶対に教育費の予算は小、中、高で使うのが17パーセントなのですが、流山市よりも若干多いかなと。図書館のお金などもふくめると、全体の22パーセントを教育費の予算として使っています。ただ、お金がないというのは同じで、教科書の貸し借りなど、税金では払っているけど、個人でははらいたくないの、それはフィンランドの悪いところでもあるんですけども、バザーをして学校の資金を集めることもしています。

※今回の議事録は、録音状態が非常に悪く、一部割愛して収録いたしました。